

## 最近に於ける商品在庫高の推移

昭和24・7・1

### 目 次

- 一、はしがき
- 二、在庫高増加の原因
- 三、一般的な状況
- 四、業種別状況
- 五、結 び

#### 一、はしがき

産業界が金銭的な金詰りに見舞われ、荷動きの停滞化をみるに至れば、当然生産せられた商品はその販路の梗塞を来すこととなり最終消費者を見出し得ず売残りを生じ在庫とならざるをえない。従つて商品在庫高の増加趨勢は、生産が増加をみているにも拘らず、一般購買力が之に追隨していないと云う現象の集約的な表明に外ならないといふものである。而して商品の在庫高が増大すればする程、商品の回転率は鈍化するに至り資本の回転率は低下し企業経理は圧迫を蒙り、惹いては利潤の減退となり企業の存立の地盤そのものまでが動揺せしめられるに至る。従つて企業としては経営上ランニングストック以上に在庫高が増加することは極力抑制せんとするのは当然のことであり、ランニングストック以上に在庫高が達することは企業経営にとつて重大な赤信号を示すものと云うことが出来よう。最近所謂滞貨の急増が一般に喧伝せられ問題とされるに至つたのも、かゝるランニングストック以上に及ぶ在庫高を保有する企業が増大し、消費財を生産する企業のみならず、生産財を生産する企業に於てまでも普遍的に拡大せんとする傾向をみるに至つたことに基くものである。尤も何を以て果して当該企業に於けるランニングストックであるとみるべきかは甚だ困難な問題で生産高と在

在庫高との一定割合をとつてみるにしても業種により、又企業規模により著しく相異し、且つ現在の如く生産から配給、価格等に至るまで統制が行われている機構の下に於ては然らざる場合と保有すべきランニングストックも異つており、その捕捉は一層困難なこととなる。従つて茲に於ては單に最近に於ける企業の在庫高の推移を表面的にみるに止めるが、在庫高の異常な急増が最近の短期間に於て顕著に現われるに至つてゐることは、少くともこのなかにランニングストック以上に及ぶ多量の滞貨的性質を帯びた在庫を保有していることを推測せしめるものであり、それが究極に於て販売不可能なデッド・ストックとなるか否かは別として、当面の問題としては一般購買力の低下を物語るものであり、それは又同時に企業経理に重圧を加えてゐると云うことが出来る。

#### 二、在庫高増加の原因

かゝる商品在庫高の急増を齎した原因としては大別して二つに分けることが出来る。一つは国内に於ける一般購買力の減退、企業金の詰りで、その二は海外に於ける需要の減退に伴う輸出の不振に基因するものである。

国内に於ける一般購買力減退の徴は既に昨年初頃より顕在化しつつあつたが、その後九原則の実施を契機に昨秋頃より激化し本年に入つてからは、二十四年度均衡予算の成立、特に之による官庁需要の減退、単一為替レートの設定等により一層深刻化せしめられるに至り、之につれ商品の在庫高も昨年末頃より急激な増加をみるに至つたものである。之を簡単に云えば最近在庫高が著増したのはインフレーションを収束化せしめんとして採られてきた財政・金融政策の効果とみらるべきであるが、他面又かゝる程度の在庫高の増大は正常な資本主義的経営に復元する過程をも示しているともみることが出来る。蓋し統制経済の機構の下に於ては生産せられたものは速かに配給され消費されるから、在庫の存在は最小限に止まるが之に反し資本主義経済の下に於いては、統制機構の下に於けるよりも大量の在庫を保有していることは性質上当然だからである。従つてこの点から見る限りこの程度の在庫高の増大を以て直ちに全般的にデフレーションへの第一歩と看做すことは正当ではないといわなければならない。たゞ刻下の問題としては企業経営、特にその資金繰が在庫高の増大に比例して窮屈化していることは事

実で、これが広汎な一般購買力の低下に基いている限りデフレーションへの転機をこのなかに包蔵していることは注目しなければならないと考える。

なおかゝる在庫高の増加は勿論有効需要の減退に基くものであるが、在庫高の増大を来している総ての商品が果して何れも真の有効需要の減退に基因しているものであるか否かについては注意を要する所である。この点に關して二つの点から検討してみよう。その一つは現在在庫高の増加をみている各種商品類のうちにあつて、現在の統制機構の下に於て異常な在庫の増加が発生していることである。換言すれば統制されているが故に在庫高が増加をみるに至つてゐるものである。その典型的事例は板硝子である。板硝子の闇価格は卸で一箱六千円近くで公定価三千六百六十八円を遙かに上廻つてゐるが、公定価格の取引に於てはその實際取引価格は公定価格を下廻ることが往々であると云う奇現象を呈するに至つてゐる。このことは板硝子の需要者は統制により一定の範囲内に限定されており、この範囲内の需要者が金詰りにより板硝子を購入しないために、換言すれば正規の取引範囲内に於ては市場が買手市場に転換してゐると云うことのために在庫が増加をみるに至つてゐるのである。すなわち統制のために全体の需要が隠蔽されるに至つており、いわば統制が有効需要を削減してゐるともみることが出来るのである。従つてかゝる種類の商品に於ては統制機構の改廃によつて当然有効需要を喚起することが可能となり在庫を消化することも出来るに至るものである。

その二は、現在企業が金詰りのため物的な意味に於ても十分な減価償却を実行しえないために、有効需要が圧縮をみるに至り、その結果在庫が増加をみるに至つてゐるものがある。その具体的事例として普通鋼材をとつてみよう。普通鋼材に対する年間需要はわが国の平和経済を維持するためには最少限年間二百萬トンが必要とするとされてゐる。然るに本年度の生産計画はこれ以下の年間百八十萬トンで、現在の生産実績はほんこの線にあるが、現実の需要は之をも十分消化することとが出来ず最近では益々在庫を増加せしめてゐる状況にある。然しこれは産業界の真の鋼材需要が減退してゐるものではなく、企業が金詰りにより機械設備等資本財に対する物的償却を延引するの余儀なき事情の下にあるため基本財としての鋼材需要の減退をみているものであつて、例えば鉄道のレール、車輛等も現状は甚

最近に於ける商品在庫高の推移

しく不満足なるにも拘らず、経費がないために十分な更新補修を行うことが出来ず、そのために鋼材需要の減退となつて現われてゐるのである。かくの如く現在に於ける在庫高の増加を電球、真空管の如く絶對的過剰生産とみられるものもあるが、その外にインフレ収束の過程に伴う相對的過剰生産、或は生産回復のアンバランスによる需給の不均衡に基くものも相当存しているといわなければならない。輸出不振に基因する輸向商品の在庫の著増は生糸をはじめ繊維製品に最も多く、この外雜貨類にもみられてゐる。もとより輸出不振の原因は海外事情の急變のみではなく、国内に於ける無定見な計画生産の破綻の結果として、或は為替レートが設定せられたにも拘らず企業合理化が不徹底のためにコスト高が解消せず輸出困難を来している等の国内的要因に基く所も多々存している。然し乍ら輸出不振のより大きな原因は海外事情の變化——米國に於ける物価の下落傾向、依然たる弗と磅の交換性の欠除等であるが、更に又わが國貿易が海外需要に盲目のまゝ行われてゐる貿易形態自体の裡にも存している。所謂盲目貿易については、最近優先外貨制度の創設によつて漸次解消の方向に嚮つてゐるが、これとても海外支店の設置、商務官の派遣等が許可されるまでには至つてゐない甚だ不満足なものである。かゝる不自然な貿易形態の結果は最近に於ける輸出品に対するクレームの發生の増加、契約解除の頻出に最もよく現われてゐる。

輸出商品のクレームの状況についてみるに二十一年八月民間貿易再開後、本年六月までのクレーム發生件数は三百二十六件、金額にして八十四萬四千ドルとなつており、五月中はクレーム發生件数三十八件、金額十八萬二千ドル、六月中は發生件数三十一件、金額四十四萬一千ドルで茲二、三ヶ月來に於ける増加が目立つてゐる。これらクレーム自体の件数、金額は全体の貿易額に対しては微々たるものであるが、然しこの数字は眞に已むをえずしてクレームとなつたもので、その背後にはかゝる危険性のあつたものが多額に上つてゐるであらうことは十分察知しうる所で、且つクレームによる危険負担が殆んど一方的にわが國業者の責任に帰せしめられてゐることは、輸出取引に対し業者が不安を抱かせ、貿易取引を阻害してゐることは大なるものがある。講和条約未締結と云う制約下にあるとはいえ、商取引が對等な立場に於て行われてゐないことは、今後の輸出伸張の障害

をなすもので輸出商品の在庫をますます多からしめるものである。

かゝる輸出品の滞貨傾向と関聯して注目すべきものに輸出品価格(主として繊維製品)の大幅な低落傾向がある。之は海外物価の下落とも相応するものであるが、之に対処するためには国内に於て企業合理化を断行しなければならぬが、敗戦後の資本蓄積の低いわが国に於ては早急には困難であり、もし然りとすれば輸出困難に陥り、ひいては外貨獲得能力が減殺されるに至ることとなる。殊に綿製品は安い価格で輸出し輸出価格に弾力性がないにも拘らず、原棉の買付に付てはわが国に自主性がないため、安い先物品を購入することが出来ず、割高になる点は注意を要する所である。なお輸出綿織物の輸出価格の推移をみるに生地金巾(二〇〇三番物)につき三月上旬二十一仙であつたものが、七月中旬には一五・五仙にまで低落し、下旬には一四・八仙とチェック・プライスにまで下つてゐる(第一表参照)。

### 三、一般的な状況

かゝる商品在庫高の推移の裡にみられる共通的な特徴についてみれば、凡そ次の如き諸点を指摘することが出来るであらう。

(1) 一般に金詰りがいわれてきたことは既に久しいが、昨秋頃までに於てはなお商品在庫高の増加傾向は緩慢であつたが昨年末から本年に入ると共に在庫高は急増をみるに至つてゐる。これは最初は金詰りといつても売掛の形式に於て商品を販売することが可能であつたものが、最近の金詰りの深刻化はかゝる形式による商品の販売をも困難ならしめる程に立至つたことを物語るものである。更に在庫の状況を取引段階別に、即ち生産業者、卸売業者、小売業者と区分してみれば在庫の激増は殆んど生産業者の許に限られてゐる。之は端的にみれば、市場が売手市場より買手市場に転位したことの現れに外ならないといえるもので、小売業者は一般購買力の低下に即応する如く商品仕入を必要限度に手控え在庫発生による商品回転率の鈍化を迴避することが出来、この結果は問屋に転嫁され、問屋は更に之を生産業者に再転嫁しており、このために生産業者に於ける在庫高が急増をみるに至つてゐるものである。

(2) 在庫高の増加傾向は消費財部門に於て最も顕著であるが、これは購買力の

低下の結果が現象として消費財部門に真先に現れる当然の結果で、特に国内購買力の不振と、輸出停滞の競合をみている繊維製品、殊に生糸、絹織物類の在庫の増加が顕著である。生糸についてみれば二十四年一月末六万三千俵であつたものが、その後漸増して六月末八万八千俵に達している(第九表参照)。人絹糸についてみれば二十三年四月末約四百萬封度が二十四年一月末千万封度、六月末千八百萬封度となつてゐる(第十表参照)。繊維品以外に於ては電球、真空管等の軽電氣部門に於て著しく、電球は通商産業省調に拠れば二十三年十二月末六百四十萬個が、四月八百六十二萬個、五月九百九十二萬個となつてゐる。其他、燐寸、藥品、針金、釘等から、バケツ、鍋、弁当箱等に至るまで在庫高の増加は目立つており、又前述の板硝子についてみれば、某社に於て二十三年四月を一〇〇として二十四年一月二三〇、七月二四七となつてゐる(第六表参照)。

(3) 主要生産財の在庫高の増加傾向は従来余りみられなかつた所であるが、本年初頭より石炭、コークスをはじめとして普通鋼材、銅、鉛等の非鉄金属に於て顕著となるに至つてゐる。すなわち配炭公団に於ける石炭在庫高の推移をみるに、二十三年九月末五十二萬五千トンが二十四年二月末九十八萬九千トン、五月末百八十三萬トン、七月末三百三十三萬一千トンに達しており、同様にコークスは二十三年九月末十萬九千トンが二十四年一月末十四萬九千トン、五月末十八萬四千トン、七月末三十三萬三千トンに及んでゐる(第二表参照)。電氣銅、電氣鉛は二十三年十二月末、夫々千八百トン、千七百トンであつたものが二十四年六月末では夫々一萬一千トン、四千トンと激増をみている(第三表参照)。普通鋼材は二十三年十月末八萬五千トン、二十四年三月末十四萬九千トン、更に六月末では十六萬トンに達している(第三表参照)。其他機械製品の一部(汎用変圧機、減速電動機、捲上機)(第四表参照)、電氣雷管、導火線、爆漿等から更に苛性ソーダ等に於ても在庫が増大をみている。かく生産財に於ても在庫増加が一般化してきたことは特に注目を惹くに至つてゐるが、然し現在程度の状況を以ては未だデフレーションに入つたとみるべきではないと考えられる。

(4) 輸出品の在庫高の動きは貿易公団の在庫高をみることによつて一応之を知ることが出来る。先づ繊維貿易公団の輸向繊維品の在庫高の推移をみるに二

十三年九月末二百五十八億円が、同年十二月末二百九十六億円、二十四年三月末三百七十三億円と増加をみていたが、五月末には二百八十億円と却つて減少をみるに至つてゐる(第七表参照)。このことは一見輸出が伸張して在庫高が減少をみた如く考えられるのであるが、二十三年八月の民間貿易再開以後に於ては繊維品の輸出は原則として民間貿易業者の手に移され、二十四年二月以降は殆んど公団による買上は行われていない。従つて公団の在庫高が減少をみつゝあることは当然の所であつて、むしろ五月末に於てもなおかゝる在庫高を保有すること自体が問題であるといわねばならない。すなわち公団の在庫高は、製品が品質或は価格の点よりいつて輸出不適格となつたか否かは別として輸出困難の結果生じたものとみなければならず、いわばデッド・ストックの性質を有するものとみられるものである。従つてかゝる滞貨は何も最近遽に生じたものではなく、過去に於ける輸出不適格品が累積したためと考えられるが、これがデッド・ストックであることが明瞭になつた所に公団の滞貨問題が喧しくなつた理由があるとみられる。

繊維品以外に輸出商品として滞貨の多いものは自転車及び同部品、ゴム製品、化学品、陶磁器、琺瑯鉄器、電気器具等その他木材、一部の機械器具、光学機械等にもみられてゐるが、鉱工品貿易公団の六月末在庫高七十六億円のうち十三億八千万円はデッド・ストックであることが明瞭となつており、前月末の十一億六千万円に比して二億二千万円を増加し、デッド・ストックの増加傾向がみられる(第八表参照)。

(5) 在庫の増加は当然、企業経営を困難にしこの打開策として先づ採りあげられてゐるのが価格の引下傾向である。価格の引下は特に在庫高の著増をみてゐるものに多く、且つ大企業よりも経営基礎の弱い中小企業に多くみられるに至つてゐる。商品種類としては絹製品、薬品、木材、釘等消費財に多いのであるが、茲に於て特に注意を惹くのはかゝる価格引下に伴う各取引段階に於ける利潤の減少割合である。勿論小売部面に於ても利潤が減少してゐるものもあるが、一般的に云えば、価格を引下げた場合でも小売商は自己の利潤を犠牲にすることは殆んどなく、価格引下による影響は之を問屋に転嫁しており、このため問屋のマージンは従来より減少をみるに至つてゐるものが尠からず生じてゐる。然し問屋もその

影響は大部分を更に生産業者に転嫁することが可能であり、結局利潤の減少は生産業者に於て最も著しく、茲にも市場が買手市場に転換した場合に於て最終消費者に近い段階程、商品選択力の強いことが示されるに至つてゐる。

(6) 右の価格引下の措置によつても十分有効需要を喚起出来ず、なお在庫高が増加をみていれば生産制限乃至中止とならざるをえないのであるが、現在までの所主要企業に於ては生産制限乃至中止は一般化するまでには至つていない。石炭生産高も着実な足取りを以て推移している。たゞ石炭に於てはこれまで中間に配炭公団が介在しており、販売困難よりくる在庫高増加の影響は直接生産業者に及んでいなかった。又輸出商品については貿易公団が同様な役目を果してきた。すなわちいわば公団が滞貨金融機能的な機能を果し企業救済的役割を演じていたため生産に影響が及んでいなかったもので、公団廃止後の生産の動きは注目を惹く所である。従つてかゝる中間の緩衝地帯のない消費財部門の一部、例えば電球、真空管、薬品、絹製品等に於ては既に生産制限を行つてゐる企業が散見されるに至つており熾寸の如きに於ては全業者が何れもかなりの生産制限を実行し、過剰在庫からくる投売のために価格が崩れることを防いでゐる。

(7) 商品在庫の増大からくる資金繰の困難を緩和するために原料手持を極力圧縮する措置がとられつゝある。蓋し現在の如く原料資材の先高懸念がみられず、且つ入手容易の状況の下に於ては何も必要以上の原料保有を行うことはないからである。一例を某自動車会社についてみるに、原料中、薄板の如き主要原料で且つ比較的品薄のものに於ては却つて保有高の増加がみられるが、大型棒鋼、コークス、木材等は二十三年十月を一〇〇とすれば二十四年六月の保有高は夫々三二、七、三一と減少をみるに至つてゐる(第十三表参照)。而してかゝる現象は又在庫が小売部面より問屋に於て、更に問屋より生産業者に於て増加をみつゝあることと対応するものであらう。

(8) かゝる在庫高の増加は資金の枯渇化を通じて優良企業と然らざるものとの弁別を全面的に顕在化せしめつゝある。而して茲に於ても合理化を逸早く行つたもの、生産能率の優れているもの、総合経営を行つてゐる企業の優位性が明瞭となつてゐる。

## 四、業種別状況

(1) 石炭・コークス 配炭公団に於ける石炭の在庫高は二十三年九月末五十二万五千トンであつたものが二十四年三月末には百十八万九千トンに達し、七月末では三百三十三万一千トンと一ヶ月の生産高を超える数量が在庫となるにいたつてゐる。公団に於けるランニング・ストックは七十万乃至八十万程度とみられてゐるから現在の在庫高はランニング・ストックの四倍以上に達してゐるわけである(第二表参照)。この在庫高の大部分は低品位炭で、このことは特に低品位炭を主として使用する中小工場の高額な金詰りの激しいことの証左であり、鉄鋼、セメント、ガス等重要企業に於ける石炭引取困難によつて生じた所は少い。尤も最近に至つては優良炭の在庫も増加をみつきあり、主要企業が金詰りのため主原料たる石炭の引取困難が現れつきある。更に石炭の在庫高がかく激増した他の一因は石炭生産が他の生産要素と不均衡に重点が偏向せられた所にも求められる。従つて量産主義に基く年間生産計画四千二百万トンの出炭計画が再検討され、配炭公団の廃止に向うのは当然であらう。

コークスは瓦斯発生に伴ひ生産せられるが、その主用途たる鋳物用、機械吹用其他の需要が減退をみたため、之に伴ひ自然配炭公団に於けるコークス在庫高も二十三年九月末十萬九千トンに過ぎなかつたものが、二十四年一月末十四萬九千トン、七月末三十三萬三千トンに増加するに至つてゐる(第二表参照)。

(2) 普通鋼材 各社合計在庫高の推移をみるに二十三年十月までに十萬トンに達しなかつたものが、十一月末十萬トンの在庫高をみてより、逐月増加し二十四年一月十四萬二千トン、六月十六萬トン、七月末では二十萬トン近くに達するものと推測されるに至つてゐる(第三表参照)。かくの如く鋼材在庫高が増加をみるに至つたのは、鋼材輸出が前期の如く進捗しなかつたこと、国有鉄道、車輛工業等鋼材の大量消費部門が二十四年度予算の成立により需要の激減をみたこと、及び造船、機械工業等に対する発注の減退を主因とするものである。普通鋼材の如く比較的生産回復の遅いものにまで一般購買力の減退が及んでゐることは注目すべき所である。

(3) 非鉄金属(電気銅、電気鉛) 非鉄金属中最近在庫高の激増をみてゐるの

は、電気銅、電気鉛である。銅は二十三年十月末千八百トンが二十四年一月千五百トンに一時減少をみたが、その後急増し六月末一万一千五百トンに達してゐる。又鉛は二十三年十月末千七百トンであつたものが、二十四年六月末四千二百トンとなつてゐる(第三表参照)。

在庫増加の主因は、予算成立による通信省筋の電信、電話等の需要の激減、又電力会社の金詰りによる電線に対する需要の低迷等であるが、銅については故銅を再生せる再生銅が品質も異ならず且つ価格が低廉なことが、新規生産銅の在庫を増加せしめる一因をなしてゐる。在庫の増加にも拘わらず、生産の減退をみてゐないのは補給金によりコストの赤字が救われてゐることによるもので、補給金廃止と共に生産は激減するに至るであらうとみられてゐる。然し現在程度の生産高はわが国の平常経済を維持するために必要とみられてゐるものであるから、もし在庫高の増加により企業経営の困難のために採掘が中止され鉱山の朽廃をみるに至るとすれば、一時的な需要減退が将来に及ぶこととなり注意を要する所である。

(4) 機械製品 機械製品中在庫高の増加が際立つてゐられるのは変圧機、減速電動機、捲上機等で変圧機は電力会社の金詰りのために、減速電動機、捲上機等は鉱山会社の金詰りによる需要減退に基因するものである。某機械メーカーについて変圧機、減速電動機の在庫高の推移をみれば二十三年七月を一〇〇として本年一月は夫々一四〇、一二二となつており、更に六、七月頃よりは生産の制限を行つたにも拘わらず、八月末で夫々二七七、一七二となつてゐる(第四表参照)。其他の大型機械類については大部分が注文生産のため在庫高の増加の現象としては現れないが、之に代つて受注減少、生産の減退となつて現れるに至つてゐる。

電球、真空管等の在庫の増加も目立つてゐる。通商産業省調によれば一般用電球は二十三年十月末六百四十六萬個が二十四年六月末には九百九十二萬個に増加しており、某一流メーカーについてみれば二十三年四月を一〇〇としてみれば二十四年一月一九一となり、その後五月三八〇、七月五〇八と約五倍強にふえており、同様に真空管は二十三年四月を一〇〇として二十四年一月二四七、五月五二二、七月七六〇と急増をみてゐる(第五表参照)。此等は需要が殆んど一巡しており、絶対的過剰生産とみられるものであつて既に生産制限の実施の段階に入つてゐる。

(5) 自動車 現在生産の中心をなしているのはトラックであるが、通商産業省調によれば本年一月に於て一時在庫の減少を見たが、その後再び増加し五月末三百二十七台と約二倍半になつてゐる。これを某社についてみても在庫高は昨年十一月末を一〇〇として本年六月末では一八九と、二月以降生産高が減少しているにも拘わらず殆んど倍加するに至つてゐる。かかる傾向は自転車についてもみられるといわれるが増加の原因としては国内需要の減退と並んで輸出の不振があげられている。在庫増加により資金繰が困難となつたために、従来は原料を大量にかゝえていたのであるが、努めてその減少を図つてゐる。即ち薄鋼板の如く入手困難なものは出来るだけ入手を図つて反つて増加しているが、その他の大型棒鋼、肌焼鋼、木材、コークス等に至つては著減をみてゐる。

(6) 薬品類 薬品類の生産過剩傾向についてはかなり早くよりいわれていたが、二、三の会社についてみれば凡そ次の如くである。即ちA社についてみれば商品在庫高は二十三年十月を一〇〇として二十四年六月は二六四に増大しており、又B社についてみれば同じく三一八と増加をみてゐる(第十四表参照)。

(7) 爆薬類 爆薬、導火線、電気雷管等の用途は炭礦其他鉱山用に限られてゐるのであるが、大炭礦筋にあつても金詰りのため、その日暮し的な購入を行うに至つたために此等の在庫の増加をみたものである。従つて必しも恒久的な需要減退によるものとは云い難いのであるが、然しこのため此等企業に於ける資金の回転が著しく悪化したことは争われない。

(8) 燐 寸 燐寸の在庫高は二十三年九月頃までは二万四千トン前後に止まつていたものが、その後漸増し本年一月四万五千トン、四月五万四千トンに達した。その後は生産高を従前の二分の一乃至三分の一程度に制限をしたにも拘わらず、なお七月四万七千トンの在庫を有し、ランニング・ストックの二倍程度のものを保有するに至つてゐる(第十二表参照)。

(9) 染料、板硝子等 染料は二十三年下半期に於て一般購買力の低下と引取切符発行の不円滑により滞貨の発生をみたが、最近再び在庫の増加傾向がみられつゝある。これは国内購買力の低下に加えて、既に早く輸入をみるべき染料が時期を甚しく失して最近に至り輸入せられたことにより供給過剰を呈するに至つた

最近に於ける商品在庫高の推移

ことにもよるものである。板硝子についても引取切符発行のツレによる在庫の増加が二十三年中に生じたことがあつたが最近国内購買力低下による売行不振がかなりあらわれるにいたつてゐる。尤も板硝子の購入先は大部分大口で小口需要は切符の関係上購入困難な所があり、現実の需要は現在の生産を消化する以上とみられてゐる(第六表参照)。

(10) 輸出品 輸出不振の結果としての輸出品の在庫状況は最も貿易公団の手持在庫高にあらわれている。輸向繊維品につき繊維貿易公団の在庫高をみるに前述の如く本年五月末に於て二百八十億円に達しており、この勢からざる部分は輸出困難なデッド・ストックとみられるものである(第七表参照)。これを裏書するものは人絹糸三億八千三百万円、スフ織物四億五千万円、スフ糸四億二千六百万円、綿糸十二億六百万円等は在庫高の全部が、人絹織物、絹織物については大部分が、又綿布についてもその過半が国内放出と予定せられてゐることで、この点からみても国内放出の未定のものについても早晩国内放出の余儀なきに至るものとみられ、公団手持品の多くが輸出不適格品であることが示されてゐる。

鉱工品貿易公団についても之と大体同様なことをいふ。同公団の輸出在庫高は本年六月末に於て七十六億五千九百万円に達しており、このうち公団自体デッド・ストックであると認めてゐる金額は機械類の六億二千六百万円を筆頭に雜貨類四億二千七百万円、鉱産・金屬類一億一千二百万円等合計十三億八千六百万円に達し五月末に比し二億二千万円の増加をみてゐる(第八表参照)。

本年二月原則として貿易公団に於ける買取が廃止せられてよりは直接輸出品生産企業の下に於て在庫が急激に増加するに至つてゐる。輸向スフ糸につき某社についてみるに本年一月を一〇〇として四月一八六となつてより急増し六月では四五〇となつてゐる。又輸向自動車タイヤ、チューブの在庫高の推移をみれば二十四年一月を一〇〇として四月は夫々一二〇、一二九と殆んど増加をみなかつたものが、輸出不振が甚しくなつた六月末では夫々五六六、二六〇に著増するに至つてゐる。

## 五、結 び

商品在庫高の増加は以上みてきた如く多くの商品に於てみられつゝあるが、こ

れが一般国内購買力の低下と輸出の不振を主因とするものである限り、在庫売却の究極の手段としては、(1)価格を引下げて有効需要とマッチせしめるか、(2)生産制限を行うかの二方法以外にはないであろう。滞貨に対する金融は応急的対策としては企業経営の困難を緩和することは勿論であり、場合によっては十分その必要が認められるとしても、商品の売行が先行見透難であれば、何時までも之に俟つことは出来ず、究極の在庫解消の手段とみることは出来ないであろう。

価格の引下については、之を既に行っている企業もみられるが、価格を引下げてもなお有効需要が喚起せられないとすれば、生産の制限を行うの余儀なきに至る。かくて生産の制限は直接的に、価格の引下は間接的に生産の縮小を齎すこととなりこの過程を通じて企業の明暗二筋道が瞭となり淘汰が激化し一時的な生産停滞を生ずる惧れがあるが、インフレーション収束に伴う不可避の過程として已むをえぬ所といわねばならないであろう。たゞ相対的な需要減退により在庫が増

第一表 綿織物弗価格の推移

	フロアー プライス	チェック プライス	三 月			四 月			五 月			六 月			七 月		
			上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
二〇〇三 時生地金巾	二〇・八	一四・八	二一・〇	二〇・八	二〇・八	二〇・八	二〇・五	一九・六	二〇・〇	一九・八	一九・〇	一八・三	一七・〇	一五・五	一六・五	一五・五	一四・八
二〇〇四 時生地金巾	二四・一	一七・二	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一	二四・一
二〇一 生地ポプリン	一四・五	二二・八	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五	一四・五
二〇二三 細布	二二・二	一六・一	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二
二〇二五 粗布	二二・二	一五・八	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二
二〇五三 生地太綾	二二・二	一七・八	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二
一六〇〇 生地太綾	二二・二	一七・八	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二
一六〇〇 ホワイティング	二二・二	一七・八	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二	二二・二

註 (1) 本表の価格は確固に對する非價格の動きを示すものとする。  
(2) フロアー・プライスに於ては實際の取引價格との幅が狭く商取引上弾力性に乏しかったが、之を引下げチェック・プライスとしてフロアー・プライスを廃止して取引上の弾力性を大きくする事を図つたが、現実には最低價格の引下をみたと同様な結果になっている。

加をみていることによつて、直ちに現在程度の生産高を以て、真に我が国の恒常的な需要とみるの誤りを犯してはならないことである。例えば前述の如く普通鋼材に対する需要は、わが国経済の正常な再生産を維持するためには現在の生産高を以ても不十分なるにも拘わらず、現実には、この程度の生産高すら十分消化せられず、在庫高が増加している状況にある。然しこれは全く金詰りによる一時的な需要減退にすぎないものである。又輸出品の滞貨は国内払下によつて、国内的には滞貨の処分は可能であるが、然し国内払下はそれだけ外貨獲得能力を減殺するものといわなければならない。従つて安易に滞貨処分を行うことによつて業者の企業合理化への努力を怠らしめ経済の合理性に立つた生産を行うことを遅らしめ、将来輸出し得べきものも輸出し得なくなり、結局に於て、再生産の基盤を弱体ならしめることのないよう留意しなければならない。(渡辺 登)

第二表 石炭及コークス在庫高の推移（配炭公団調）

昭和二十三年九月	二八、七六七	三〇六、二六七	五三五、〇三四	一〇九、〇〇〇
	三六五、三五九	三三二、九五	六九八、二七四	二九、〇〇〇
十月	四六二、五一四	三四九、〇三八	八一、五五三	一四五、〇〇〇
十一月	四一〇、七七一	三三四、七一	七四四、七八三	一四一、〇〇〇
十二月	五二九、五五五	三三四、二七七	八五三、八三三	一四九、〇〇〇
昭和二十四年一月	六〇八、三二〇	三八一、六六六	九八九、九九六	一四八、〇〇〇
二月	七〇一、〇二二	四八八、〇一四	一、一八九、〇三六	一二三、〇〇〇
三月	九七六、三六〇	四六三、五八四	一、四三九、九四四	一六二、〇〇〇
四月	一、二八六、一一六	五四四、五六九	一、八三〇、六八五	一八四、〇〇〇
五月	一、六四〇、〇六五	七〇五、五〇二	二、三四五、五六七	二五五、〇〇〇
六月	二、四七、二二六	九二四、一〇〇	三、三三一、三六六	三三〇、〇〇〇
七月				

第三表 普通鋼材、電氣銅及電氣鉛の在庫高の推移 (単位 吨)

[illegible]

（備考）電気鉛については昭和二十三年六月―九月の数字は不確につき省略。

最近に於ける商品在庫高の推移

第四表 主要機械製品の生産高、在庫高の推移(某社)

昭和二十三年七月												汎用変圧機	減速電動機	捲上機	ミシン			
昭和二十三年七月																		
八	七	六	五	四	三	二	一	十	十	九	八	七	生産高	在庫高	生産高	在庫高	生産高	在庫高
元	八	一五	一四	一五	一九	一八	二	九	一〇	一五	一〇	一〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
二七八	二五三	二四九	二五八	二四二	二〇五	一九二	一四二	一三三	一五五	一三三	一一一	八七	一二〇	九七	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
九	二〇	二〇	一四〇	一四〇	二二〇	二一三	一〇〇	二二七	二一〇	一〇〇	九三	二一〇	一〇〇	九七	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一七三	二二三	二二五	二二九	一七五	一七三	一三九	一三三	一〇三	七五	一七	一〇六	九七	一〇〇	九七	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一	一	四三	三五	一四	一五〇	二〇〇	一七一	一八六	一七一	一四	一四三	二一	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
二、〇四〇	二、一〇〇	二、一二〇	二、一〇〇	二、〇一〇	一、七八〇	一、三〇〇	八四〇	五二〇	一六	一〇〇	一	一	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
二三八	二三五	二二六	一七八	一八九	一四三	一八三	一二七	一六三	一四二	一三三	一三〇	一〇八	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
七二二	六五五	四〇八	三五五	三三九	二三八	二五五	二二七	一六三	二四九	二〇〇	二六五	一九	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

第五表 電球、真空管の在庫高の推移(某社)

	電	
昭和三十四年四月	球	一〇〇
五月	九二	一三八
六月	九一	一七四
七月	一一〇	一七八
八月	九九	一八六
九月	一五七	二〇三
十月	一二三	二一五
十一月	一七四	二五九
十二月	一八九	二四七
昭和二十四年一月	一九一	
		眞空管

昭和二十四年二月	
三月	二二五
四月	二二六
五月	二九八
六月	三八〇
七月	四一九
七月	五〇八

昭和二十三年七月	
八月	一六七
九月	一七三
十月	一七四
十一月	一七七
十二月	一六九
昭和二十四年一月	一五二
二月	九五
三月	九五
四月	一三八
五月	一七七
六月	一七五
七月	一九八

第六表 板硝子の生産高在庫高の推移(某社)

昭和二十三年四月	
五月	一〇〇
六月	一七五
六月	一六四

昭和二十三年七月	
八月	一六七
九月	一七三
十月	一七四
十一月	一七七
十二月	一六九
昭和二十四年一月	一五二
二月	九五
三月	九五
四月	一三八
五月	一七七
六月	一七五
七月	一九八

第七表 繊維品在庫高(繊維貿易公団調)

昭和二十三年九月末	
生糸(輸出向)	二八
金(百万円)	二、五〇三
(加)	二、五二五
金(百万円)	一、三一五
原綿(加工)	七九、四一三
金(百万円)	一、一四一
綿	二七、八九五
金(百万円)	八六八
綿	五九六、五八九
金(百万円)	九、六三〇

昭和二十三年十二月末	
生糸(輸出向)	二三
金(百万円)	二、七五五
(加)	一、八六四
金(百万円)	八五三
原綿(加工)	七、一四五
金(百万円)	二二三
綿	一七、二一八
金(百万円)	五二六
綿	五八九、六五二
金(百万円)	一一、一五八

昭和二十四年三月末	
生糸(輸出向)	九
金(百万円)	一、二四八
(加)	一、二三三
金(百万円)	四一五
原綿(加工)	一七、一一九
金(百万円)	四九〇
綿	二〇、七三〇
金(百万円)	一、四三九
綿	六〇四、五九六
金(百万円)	二〇、三〇一

昭和二十四年五月末	
生糸(輸出向)	八
金(百万円)	一、一四四
(加)	一、〇一四
金(百万円)	二六三
原綿(加工)	五、七〇六
金(百万円)	一七〇
綿	一〇、八九五
金(百万円)	一、二〇六
綿	三五八、五八九
金(百万円)	一一、九九二

昭和二十四年五月内に出すべきもの	
生糸(輸出向)	(一〇、八九五)
金(百万円)	(一、二〇六)
(加)	(一、二〇六)
金(百万円)	(二八五、五八九)
原綿(加工)	(六、七〇八)
綿	(一〇、八九五)
金(百万円)	(一、二〇六)
綿	(三五八、五八九)
金(百万円)	(一一、九九二)

昭和二十四年六月一見込	
生糸(輸出向)	(輸出 八)
金(百万円)	(輸出 一、一四四)
(加)	(輸出 一、〇一四)
金(百万円)	(輸出 二六三)
原綿(加工)	(輸出 五、七〇六)
金(百万円)	(輸出 一七〇)
綿	(輸出 一〇、八九五)
金(百万円)	(輸出 一、二〇六)
綿	(輸出 三五八、五八九)
金(百万円)	(輸出 一一、九九二)

[illegible]

第八表 輸出向鉍工品在貨高（鉍工品貿易公団）

[illegible]

第九表 生糸在庫高の推移状況（日本製糸協会調）

昭和二十四年	一月	二月	三月	四月	五月	六月
工製 場糸 在業 荷者	一〇、四七四	一〇、九四一	一一、一〇四	一一、八四四	一一、三〇七	一一、四七二
市 場 在 荷	七、九九九	一五、〇四九	一四、五七一	二四、一〇五	三一、五三七	二九、八七四
業日 会本 在蚕 荷糸	二九、六七二	二八、五五〇	二八、一六七	二八、〇九三	二八、〇一二	二八、〇一二
公織 団維 在貿 荷易	九、七二二	九、三八五	八、六九三	八、五八三	八、四三九	八、三六四
其 他	五、九七〇	五、九八六	七、三七八	六、二八八	六、四二八	一〇、八五三
計	六三、八三七	六九、九一二	六八、九一三	七八、九一三	八五、七二三	八八、五七五

第十表 人絹糸の生産・引渡・在庫の推移（人絹会社合計）

昭和二十三年	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月
生産高	二、六八八	三、〇〇八	三、二三八	三、三七一	三、五九二	三、七九三	三、一〇九	三、四八四
引渡高	一、九一四	一、六六一	二、六八	二、八〇〇	三、五六六	二、三四六	四、〇七三	三、一一三
在庫高	三、九四九	五、三五六	八、三二六	八、八六八	八、八九四	一〇、三四一	九、三七八	九、七四九
昭和二十三年 昭和二十四年	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	
生産高	三、四九九	四、二四九	四、三四二	四、八〇一	五、七〇一	五、九三四	五、八七三	
引渡高	三、〇五五	四、三二四	四、八二〇	五、三一一	二、七五二	二、五七五	二、九三九	
在庫高	一〇、一九七	一〇、一二一	九、六四三	九、一三二	一二、〇八一	一五、四四〇	一八、三七五	

(註) 生産・引渡・在庫高は内需用を含む。

第十一表 輸出用スフ糸及輸出用自動車タイヤ・チューブ在庫高の推移

昭和二十四年							
一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月		
							スフ糸(某社)
一〇〇	九三	八一	一八六	三九五	四五〇		
							タイヤ(某社)
一〇〇	四〇	八四	一二〇	二二四	五六六		
							チューブ(某社)
一〇〇	七三	二五	三九	一〇九	二六〇		

第十二表 燐寸の生産高及在庫高の推移 (単位 トン)

昭和二十三年													昭和二十四年													生産量		販売量		残高																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七

第十三表 自動車主要原料在庫高推移 (某社)

昭和二十三年	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	昭和二十四年
一〇〇	六七	六六	六二	三五	四五	三五	四〇	三三		
一〇〇	七二	七五	八三	一五〇	一六二	一五八	一五〇	一六三		
一〇〇	七八	七三	六〇	四五	三九	四二	五〇	四五		
一〇〇	七五	四九	五四	三二	一七	八	一〇	七		
一〇〇	七九	六二	七二	一三一			五二	四五	三一	
大鋼型	薄板	肌焼鋼	クコス	木材						

第十四表 薬品の在庫高の推移

昭和二十三年										昭和二十四年																																																																															
十月										十一月										十二月										一月										二月										三月										四月										五月										六月									
A																																																																																									
一〇〇										九六										一二九										一三九										一四九										二〇三										二三九										二五一										二六四									
B																																																																																									
一〇〇										一〇八										一四五										一六一										一八五										二四四										二八〇										三〇五										三一八									

最近に於ける商品在庫高の推移